

# 発想転換「原油を重油に」



三井物産に勤めて19年目の1995年、石油火力発電所用の燃料となる重油や原油を調達する仕事に当たっていた。電力会社が指定する規格の燃料を海外から調達するのが役目だ。

三井物産は同年6月、豪州北西の海洋にある「ワンドゥー油田」の権益の4割を購入。油田の権益獲得に本格的に参入した。

重油に近いワンドゥー油田の原油

## 豪油田開発 電力向け販売

三井石油開発社長 日高 光雄さん



三井物産に勤務していた1995年、電力グループの仲間たちと懇親会で。後列右端が日高さん

あのころ

は成分が特殊で、このままでは使い道が限られることが大きな問題だった。発電用の燃料として売り先を確保するために考えたのが、この原油と、別の原油を混ぜ合わせることで、豪州西部の天然ガス事業に伴って採取される原油の売り先を探していたこともあり、ブレンドして使うことにした。

必死に売り込み方法を考えた。解決の糸口は部下との雑談の中にあっただ。「重油に近い原油だから、重油として売ればいい」と思いついたのだ。

ところが、試験室で2種類の原油をブレンドする研究をしたが、うまく混ざらない。この方法は断念せざるを得ず、大きな誤算だった。

原油価格の下落で経営環境は厳しい。だが大切なのは発想を転換してチャレンジし続けることだ。権益を確保したもの、現地の政治情勢などで開発できずにいる油田もいくつもあり、確実に生産までつなげていくことが課題だ。まずは足元をしっかり固めて将来の飛躍につなげたいと考えている。

聞き手・安藤大介



ひだか・みつお  
1955年生まれ。徳

島県出身。77年慶応大経済卒、三井物産入社。エネルギー第2本部長（液化天然ガスなどを所管）などを経て、2012年4月から三井石油開発副社長。同6月から現職。趣味はヨット。60歳。

2012年に子会社で石油開発専門の三井石油開発の社長に就任した。

原油精製後の製品である重油と、そもそも原油を混ぜることは、通常あり得ないことだった。貯蔵するタンクも本来は別々だ。しかし、ワンドゥー原油の成分は極めて重油に近いので、重油と混ぜて成分を整えれば、火力発電用の燃料に使えるという新しい発想だ。

関西にある製油所にアイデアを説明し、専門家の助けを借りながら混合に成功した。97年3月の本格生産に伴い、電力会社の燃料として納めることができた。

原油の輸入にかかる関税は、重油よりも大幅に安い。このため、ワンドゥーの原油はコストの低い「重油」として売りこめるメリットもあった。アイデアが実を結び、その後の自信にもなった。三井物産としても、油田などの権益獲得事業に乗り出すきっかけとなった。